

郡上鷲見氏820年準備会の報告！

室町時代から江戸時代初期の鷲見氏

- ①頼保 ——— ②重保 ——— ③家保 ——— ④保吉 ——— ⑤長保 ———
 ⑥鷲見忠保 ——— ⑧ 干保(加賀丸、忠保の長子) ——— ⑨氏保(干保の長子) ———
 ⑦保憲(忠保の弟)
 — ⑩行保(氏保の長子) ——— ⑪朝保(行保の3男) ——— ⑫保兼(行保の5男) —
 — ⑬永保(朝保の子) ——— ⑭保光(北野城2代城主保定の弟で保兼の養子) ———
 — ⑮保義(永保の子) ○印は何代の城主

承久の乱以降北条氏のもと、鎌倉の政令が全国に普及したので、隣境を侵略したり、他領を押し取る者も少なく、平和な時代が過ぎていった。

承久以降の鷲見氏は家保から子保吉、諸保、長保を経て忠保になる。鷲見忠保は牛道郷野添村の六ツ城主猪俣五平治と共に、油阪を通り越前穴馬郷大谷村に兵を進めたが、程なく共に軍を返した。その後鷲見氏は猪俣氏と不和になり穴馬の領地は鷲見氏のものとなり、猪俣氏は東氏に接近していった。鷲見忠保は東時常と連合して行動を共にし、また、元弘、建武の際にも東常頭と共に足利尊氏の旗下に属し、行動を共にしている。この両家の親睦は、郡上一円が平穏無事に過ぎ、住民は泰平を楽しんだ。しかし、世は後醍醐天皇が親政を施行した(南北朝時代)以降、武士間の論功行賞につまづき、尊氏は九州へ、天皇方は比叡山の山徒とむすんだ。

【建武の新政】 正元元(1333)年 12月後醍醐天皇は京都を逃れ、吉野で政を取ることになった。尊氏は京都で光明院を擁立して幕府を開いた。天下は宮方と武家方の二つに分かれ、乱世が57年にも及んだ。この時、土岐頼貞は武家方に従い、その功績によって美濃国守護に任ぜられた。

東氏も鷲見氏も土岐氏に従っていたから武家方であった。当時の美濃国内の平坦地は戦火を蒙ることは多かったが、郡上郡では軍兵の徴発と戦費の徴収が厳しかった。鷲見忠保は武家方として部下の兵を率いて美濃の墨俣、近江の森山・宇治に入り宮方と転戦した。その功績に対し、武家方から感謝状を貰い、所領を安堵されている。

【観応の擾乱】 正平年中(貞和、観応)になると尊氏と弟直義との間が不和になり、武家方の分裂、宮方への協力など、二人の争いは複雑に続いた。この時、宮方についていた直義は鷲見忠憲(忠保の弟)を招いて味方をお願いした。保憲(忠保の子供が幼少であったため城主となる)は数々の武功を直義のためにあげ、直義は彼に感謝状を贈っている。

一方、忠保の長子加賀丸論人は干保といい、尊氏方についていたので叔父と甥の争いになった。尊氏は正平6(観応2、1351)年直義を討つため加賀丸に自筆で招致状をだした。これによって叔父・甥対立が始まったが同年直義が近江観音寺の戦いで敗れ、越前に退く。加賀丸は土岐頼康の軍に加わって可児郡の伊岐津志城を攻撃した。翌年には尾張で宮方が蜂起したので、加賀丸は美濃守護代齋藤桃之に属し、宮方相手に尾張国葉栗郡大仙寺や熱田で戦うも、敗れて墨俣まで退却、京都(土岐頼康)へ援軍を頼んだ。6月には再び尾張の宮方が長森城を襲撃したが、加賀丸は墨俣にて宮方を破り、追撃して郡戸まで迫った。

【明德の変】 元中4((1387)年、美濃国守護代ないで後継者問題で室町幕府の介入を受け、元中7(1390)年幕府は当時京都にいた加賀丸を美濃国に帰らせ、斯波義重・佐々木高秀らと共に土岐頼益を助け、康行(土岐頼康の養子)を討たせ川手・長森・小島の三城を攻め、

康行を降参させた。

この動乱後、美濃には康行の残党が多く、鷺見郷を侵す者が多くあったので、加賀丸は幕府にその対処を願った。観応 2 年管領細川勝元は美濃国守護土岐頼世に命令を下し、これを退け、本領を安堵させた。これは加賀丸に要求によるもので、その後の氏保、孫の行保、さらにその孫の光保を経て貞保の天文年中にわたり鷺見氏が本領を安堵相伝した。なお、加賀丸の晩年から鷺見氏は衰え始める。

応永 7 (1400) 年鷺見氏保は幕府に対し書状を送り、幕府は美濃国守護に対し再度命令をして安東三郎 (東氏の一族) の鷺見郷侵略を退けさせた。応永 16 (1409) 年には東氏はたびたび鷺見郷へ侵略するので、守護土岐頼益は東氏を攻撃し、この頼益の来援によって東氏は鷺見氏・土岐氏と和議を結び事は収まった。応永 22 (1415) 年の伊勢国北畠満雅の乱で氏保と東益之は共に出陣している。

その後応仁の乱が始まるまでは、郡内は平穏であった。嘉吉元 (1441) 年東益之が死に、文安元 (1444) 年には鷺見氏保も死に、鷺見城には氏保の子行保が居城した。応仁後、明応、文亀、永正、大永、享禄、天文、弘治、永禄を経て天正となるが、その間百年、幕府の命令は全く地方には伝えられなかった。

【応仁の乱】 応仁元 (1467) 年から將軍家の家督相続争いに管領の細川勝元派 (東軍) と山名持豊派 (西軍) との争いが加わり、約 11 年間京都を中心に続けられた争乱。京都は荒廃し、幕府の威厳は地に落ち、諸将は戦に疲れ、地方武士が起こり荘園制は崩壊し、下克上の戦国時代に入っていく。

しかし、鷺見家には、加賀丸以降中央に名を現すほどの人物はいなく、足利幕府は平穏だったから忠保や氏保の時のように出兵する必要がなく、平和な郡上でもあったろう。地の利を得ない鷺見氏は、次第に威力を増してきた東氏に肩を並べることができなくなり、劍村の阿千葉城に起居するようになった。

天正年中に阿千葉の鷺見氏一族が東氏の命に背いたので、東氏は鷺見氏を攻撃した。鷺見氏は城をよく死守し防戦したが、遂に落ちた。元来鷺見氏の居城は鷺見城であるため、東氏は鷺見氏を家来とせず、騎下となっただけであった。

天文 10 (1540) 年、東氏は阿千葉城の鷺見氏を滅ぼさんと攻撃を加え、翌年城主鷺見貞保は子を老臣に預け、自殺した。

明応 3 (1493) 年、鷺見行保がなくなり保兼が居城したが子供がなかったので、保重 (行保の 2 男) は北野城主の 2 男保光を養子とする。保光は城をよく守ったが、金森長近が越前攻撃のため鷺見郷を通過したときは鷺見上野に逃れている。

【秀吉の文禄・慶長の役】 秀吉は国内統一を成し遂げると、新たに海外への進出をくわだてた。一方郡内では遠藤氏の勢いはますます強くなり、それにひきかえ、鷺見氏は次第に衰退していった。秀吉は、朝鮮に対して日本への朝貢と対明侵攻のさいの先導を求めた。朝鮮がこれを拒絶すると、文禄元 (1592) 年、秀吉は肥前の名護屋陣をしき、大軍を動員して朝鮮を侵略した。秀吉軍は平壤などにまで進出したが、武将たちの間の不和と、李舜臣にひきいられた朝鮮水軍の攻撃や朝鮮の義兵による抵抗、明の援軍などのために、しだいに追いつめられていった。講和の交渉に臨むため、秀吉はいったん兵をひかせたが、交渉が不成立に終わると、慶長 2 (1597) 年、再び出兵し、侵略した。翌年秀吉の死により朝鮮から撤退した。

鷺見大鑑に鷺見朝保が朝鮮へ出兵し活躍されたことがのっている。要約すると以下の通りである。「鷺見長門守殿 (鷺見朝保) は朝鮮陣の時 (1597)、260 騎で出陣され、岩瀬城で大変な手柄を立てられた。その時、とらあやという打ち物を奪い取って日本へ帰ってこられた。これを都の帝王 (秀吉?) へ献上すると、大量の褒美をいただいた。翌年、鷺見氏は大番役 (地方の武士が京都の警護をする役) に当たり、家来 130 人を連れて出陣した。」



【関ヶ原の戦い前後の郡上と鷺見氏の終焉】

慶長 3 (1598) 年秀吉が死ぬと、徳川家康の勢いが増し、石田三成が豊臣氏の不利になることを憂いて豊臣秀頼を奉じて諸国の大名を

誘って慶長 5 (1600) 年関ヶ原で戦いに及んだ。その時、関ヶ原の前哨戦として岐阜城の城主織田秀信は石田三成の西軍に属しており、郡上八幡城主稲葉貞道も西軍となった。かねて加茂郡小原へ転封されていた遠藤慶隆は徳川家康の東軍に属した。これは遠藤にとって旧領を回復させる機会と思い、飛騨の金森氏の援軍を頼んだ。そして金森長近の息子の可重(慶隆の娘婿)の助けを命じ、9月1日を期して八幡に攻め寄せる手はずを整えた。この時、鷺見城の城主は鷺見朝保の孫の鷺見忠左衛門で、遠藤家の家老として従軍していた。

犬山城に陣を張っていた稲葉貞通は、八幡城が攻撃されていることを知るとすぐに兵を引き連れて郡上に向かった。稲葉貞通は西軍から東軍に移ったこともあり、貞通の家臣は同士討ちとなり和議を勧めたが、貞通はこれを聞き入れず慶隆軍を攻撃した。慶隆は鷺見忠左衛門ら五人の奮戦により危機を脱し、吉田川を渡って小野山の金森可重に逃げ込んだ。赤谷を攻撃し八幡に入った貞通は、使者を小野山に送り和議を結んだ。貞通は関ヶ原の戦い後豊後国臼杵に移され、遠藤慶隆は郡上2万7千石の城主として八幡城に復帰した。

その後のことについて鷺見大鑑には次のように書いてある。その要約を記す。「慶長年中(1596～)鷺見忠左衛門殿(保義)が討ち死に、慶長5(1600)年の10月に正ヶ洞の餌取弾正(氏保の孫で八右衛門の子)という人が、鷺見忠左衛門殿討ち死にと聞いて、急いで鷺見城の柳の丸(巢郷の馬場の西)へ乗り込んだ。その時、留守居役人の松下五左衛門(朝保からの留守居役)という人が、下屋敷(向鷺見の居館?)でも留守居役を勤めていたが、弾正が城を攻めてきたので、無念であると言っても為す術がない。

弾正を討ち取ろうと心がけて、その日の四つ時に柳の丸へ行き、弾正殿が城を乗っ取ろうとしたのはよく分かった。「自分は浪人のみであるから日中より今晚暮を打ちたいので燈火を準備しておいてください」と。弾正殿は快くその申し出を固く約束され、その日の夕方、五左衛門は柳の丸へ昼に約束したとおりに参上した。弾正殿は燈火に松を入れ準備していたところへ、五左衛門が斬りかかってきた。弾正殿は防御の方法なく討ち果てた。五左衛門殿は襲撃の準備をし、弾正殿は油断したので、五左衛門はしたたかに髪を乱し、刀を振り回したので、その刀が脇にはいり弾正殿は討ちしにした。その時、弾正殿には女房と男2人、乳母の4人が城に火をかけたので、五左衛門がおろおろしている内に、郡上谷赤岩というところの岩の狭間に隠れておられました。

その後、切立村の西入坊という人が姫様に出会い、「あなたはどのような人ですか」と尋ねたら、姫様は手を合わせて西入坊に助けてくれとお願いされた。西入坊はお供して切立村の御堂に姫様を隠した。そのことを松下五左衛門が聞き、西入坊へ訪ねて行って「弾正の女房を出せ」と言いつけた。その時、西入坊は男子の2人を自分の後ろに回し、高窓から差し出し、侍の女には目をかけてはいけないと言った。五左衛門はこれを聞いて向鷺見村へ帰って行った。」

鷺見城は鷺見忠左衛門保義が遠藤氏の禄を受けるに及んで表向きは廃城になっていたが、その上、忠左衛門の第二子忠三郎が八幡城の戦いの時、八幡の小坂保岐で討ち死にしているが、その後も松下五左衛門が管理していたのも事実だろう。

(完)

